

パーソンズと機能システム理論の課題 —「構造—機能」理論に新しい意味を求めるための覚書—

大黒 正伸

Agenda of Parsons and Functional Theory:
Toward an Alternative Analysis of “Structural-Functional” Theory

OGURO Masanobu

1. はじめに

筆者は、『パーソンズ社会理論の方法的構想力—一般理論から「媒介」の理論へ』[大黒 2009]において、タルコット・パーソンズの社会学理論の方法論的な再構成を目指したのだが、十分な議論を施していない項目がいくつかあることに気づいていた。その最大のもは「機能主義」をめぐる議論である。これを中心に扱わなかったのは、パーソンズの生涯にわたる社会学理論の展開において、「機能主義」は一般に言われるほどの意義を持たないと判断したからである。もちろん、パーソンズは社会学における「機能主義派」の始祖のひとりであり、最も影響力のある理論家だった。

1940年代の後半から、パーソンズは「構造—機能分析 (structural-functional analysis)」ないしは「構造—機能理論 (structural-functional theory)」を標榜した (cf. [Parsons 1945/1954])。それ以後、社会学における「機能主義」は少なくとも第二次大戦後の社会学の理論シーンをしばらくは圧倒してきた。その後、1960年代にいたって漸く凋落の色を濃くしてきたが、いまなおパーソンズは社会学的機能主義と称される学派の代表と目されている。したがって、かねてから機能主義全般に対する批判がそのままパーソンズに対する批判と同一視されることが多かった。

しかし、彼の社会理論の構想と展開の全体は、その「構造-機能主義」よりもはるかに複雑かつ可変的だった。ジェフリー・C・アレグザンダー[Alexander 1983]やローランド・ロバートソン[Robertson 1991]らは、機能主義一般に対する議論とパーソンズに対する評価とを注意深く区別しようとした。パーソンズを擁護する立場にも様々な違いがあるが、パーソンズの死後に目立ってきたのは彼に対する「実質的」「歴史的」、または「イデオロギー的」な評価である (cf. [Buxton 1985] [Robertson & Turner 1991])。そうした傾向は、いわばパーソンズの知的作業そのものを社会学的な「近代主義」の古典のひとつとして捉えるという性格を持っているように思われる。こうしたパーソンズ評価を良く表すフレーズを挙げるなら、「近代を生き尽くす」[油井 2002]「反郷愁 (against nostalgia)」の人にして「最後の近代主義者」[Holton & Turner 1988]といったところであろうか。

しかし、こうしたパーソンズへの見なおし作業は、彼の理論的中核である機能的システム図式にはほとんど言及していない。パーソンズの世界観を問うことの意義は疑いないとはいえ、やはり彼の理論のはらむ論理的問題、または「方法論」を問うこともまた、同等に重要である。ここでは、パーソンズの理論構築の方法において中核を占める「システム理論」のうち一定の側面-機能、均衡、構造など-に絞って、その問題と意義とを検討する。

それにしても、「機能主義」「機能理論」「機能分析」・・・こうした名称が指す理論的な立場ほど今日の社会学で「ネガティブ」なイメージを持たれているものも少ないだろう。これら（まとめて機能主義と呼ぶことにする）は、すでに1970年代末には、教科書の類では「衰退しつつある」「厄介もの」として扱われていた[Moore 1978: 321]。20世紀後半の社会学の歴史は、「機能主義」対「反機能主義」の争いと後者の圧倒的勝利（または前者の完敗）といったイメージで語られることが多い[Giddens 1977: ch.1]。

あたかも「絶滅危惧種」なみの機能主義ではあるが、その意義は消滅したのだろうか。筆者にはそう思えない。直井優は「構造-機能理論の没落からの克服は可能である」と述べる[直井 2001: 199]。志田基与師によれば、「社会システムの一般理論を構築すること」こそは「社会に対する確実な知識を提示するという」「社会学者に制度的に課された使命」を果たすために

も有望なことである[志田 1997:34]。

筆者自身は、こうした意見に賛同する。人間存在に対する科学的研究はいかなる可能性も排除されるべきではないし、自然科学的な方法を厳格に当てはめることも、倫理的な次元を除けば、少なくとも最初から忌避すべきではない。しかし、今日、社会学は方法論的に独自の道をゆくべきだという意見もまた根強いのは確かである。「意味学派」パラダイムの乱立や「言語論的転回」は確かに社会学の自立を促す魅力的な誘引だった。それは、いわば機械論への反対だった。人間存在は、有意味な世界に生きる存在である。社会学が伝統的に想定してきた人間観の多くは、主観的な意味を思念する主体的な存在であり、機械の作動や物理的運動、生物学的本能に還元して説明されるべきではないという意見が大勢である。

とはいえ、自然科学も機械論も、社会学において全否定されるべきだとは思われない。筆者は、パーソンズに倣って、何らかの「収斂」[Lidz & Bershadsky 2000]を図る必要を感じている。本稿は、いささか時代遅れと思われるだろうことを承知のうえで、改めてパーソンズの機能システム理論を取り上げるのだが、それは、そうした収斂を機械論に近いところから試みるためのささやかな準備作業である。

2. 機能概念の諸問題

2.1 目的論をめぐる問題

パーソンズの「構造－機能主義」は、経済学が物理学に範をとったように社会学もまた体系的な理論をめざすべしという構想を彼が示したことに始まる。ただ、少なくとも社会学はそうした体系性と形式性とを完備した理論を持ち得る段階にはないことから、彼は「次善」の選択肢として構造－機能理論を構想した(cf. [Parsons 1945/1954:212-237])。そうした構造－機能理論におけるキーワードは、言うまでもなく「機能」である。ただ、パーソンズは、早くから「システム」の観念を自らの理論的準拠枠に導入していた。彼にとって、機能よりもシステムの方が古くから馴染みのある概念だったように思われる。主意主義的行為理論は、単位行為とともに、行為の創発的な

システムを考案した[Parsons 1937/1968: 78f 767-769][厚東1980: 79-80]。彼の機能概念は、システムという「上位」の概念を前提している。機能とは、パーソンズにとってシステムという全体に対する部分の貢献を指している。

システムにとって必須の機能的貢献は、パーソンズらによって「機能的要件」または「機能的命令」と呼ばれた (cf. [Parsons 1951: 484][Parsons & Smelser 1956: 19])。AGILは、そうした要件の名称である。パーソンズは、システムを内部変数どうしの相互依存によって定義した。システム一般は、パーソンズによって以下のように特徴づけられる。①相互依存性：安定した諸部分ないし諸項目は相互依存関係にあるべきである。②均衡：安定したシステムは内外の変化にも関わらず、一定の状態を保つ傾向がある。③システム境界：安定したシステムは、環境に対して一定の境界を維持する。システムの均衡は、社会システムについては諸行為者の相互作用の安定がそれにあたる。社会秩序は、相互作用の「自己維持的」な安定によって一般的に特徴づけられる[Parsons & Shils 1951: 107-109]。システム一般の形式的な機能関連として必須4機能 (AGIL) を図式化する作業は、社会理論やパーソナリティ理論の展開、経験的な共同研究 (経済と社会、家族と社会化、政治権力など) に並行して行われた[Parsons & Bales 1953][Parsons & Smelser 1956][Parsons 1969]。

こうした機能要件の観念は、機能主義や機能分析に対する方法的ないしは論理的な論争を引き起こしてきた。とりわけ、科学的方法としての健全さを問われることになった。それは、主に以下のような嫌疑であった。：そもそも「システム」や「機能」という概念は科学的な地位を持ち得るのだろうか。；それは生物有機体の単純な「引き写し」や類推であって、いわゆる「目的論」の誤謬に陥ってはいないだろうか。

カール・ヘンペルは、科学哲学の立場から、機能分析を目的論の緩和された一種と見た。目的論は、一種の「論点先取」である。「AはBの機能を持つ」という言明は、「Aが存在するのは、Bのためである」という含意を持ち得る。「～のため」とはどんな事態を指すのだろうか。「心臓は血液循環を行っている」という表現は単なる記述であるが、「心臓は血液循環のために存在する」という表現はそうではない。機能という概念に含意されている

「貢献」という意味合いは、そうした先取りされた「目的」を指すと解釈されかねない。設計者が存在するメカニズムは、そうした表現が可能である。複雑な部分/全体関係を持つ実体—有機体や社会—は、そうした意味での「機能的な記述」によって表現されることが多い。

ヘンペルは、自らの包摂法則の議論に照らして、機能的な説明の欠陥を論じている。ヘンペルの因果的説明の図式によれば、事態の説明命題は説明項 (Explanans) と被説明項 (Explanandum) に区分され、説明項は一般法則と初期条件に区分される。こうしたヘンペルの演繹・法則モデル (DNモデル) に照らせば、機能による説明は一種のトートロジーである。機能分析の問題は、主に「初期条件」と一定項目の「存在」との関係にある。

ヘンペルは、以下のように機能分析の一般的な流れを提示する。すなわち、①或る時点 (t) において或るシステム (S) が良好に作動するのは、(S内外の) 諸条件 (C) の下である。②諸条件Cの下でシステムSが良好に作動するのは、Cに含まれる必要条件 (n) が満たされる場合である。③システムSにある項目 (i) が存在する場合、結果として必要条件nが満たされる。④それゆえ、時点tにおいて、Sのなかに項目iが存在する [Hempel 1959: 287]。

ヘンペルによれば、こうした説明は論証になっていない。なぜなら、④が言われるためには、③において項目iが存在する場合にだけ必要条件nが満たされることを論証していなければならないからである。ここにおいて、項目の存在そのものが必要条件満足と等値されている。直井優のようにそうした項目の代替的な「幅」(クラス) を考えることでトートロジーを緩和しようとした試み [直井 1979: 26] もあるが、そうした緩和措置をとったとしても、機能要件という概念は必要条件とそれを満たす項目の発見リストを作成するのに役立つにすぎない。

しかし、その後、目的論の論理はサイバネティクスの登場によって新たな位置を与えられた。目的論のサイバネティクスの展開については、日本において活発な議論がなされてきた。吉田民人は、すでに1960年代において構造—機能主義における目的論と均衡論を精密に検討し、概念的な批判と代替案とを提出している。彼は、当時の構造—機能主義に見られる特徴を検討し、

パーソンズのそれがシステム分析（均衡分析）と要件分析とから成っていることを指摘した[吉田 1962]。経済学者でもあった小室直樹は、吉田の指摘を受けて、構造－機能主義を相互連関分析（システム分析と均衡分析）と要件分析とに区分する[小室 1966: 77-85, 1967]。吉田も小室も、複雑な社会的現実を分析する科学的な理論においては、目的論を全否定しない。彼らはシステムが一定の「目標」を持つ可能性を指摘する。小室は、有機体に対する素朴なアナロジーに見られる「素朴目的論」と近年のシステム理論に見られる「サイバネティクス目的論」を峻別しようとした。素朴な目的論はシステムの目標状態の実現に関する「条件」を提示せず、多くは予定調和的で自動的な成長や均衡の実現を述べている。科学としての機能分析は、目的論を「制御分析」として科学理論のうちに位置づける。制御値や評価関数を導入することで、システムの科学は目的論を、条件つきながら、科学的議論の要素にすることができる[小室 1969: 12f, 1974: 32f]。機能主義における機能要件は、システム分析におけるこうした制御論の要素を表現している。

筆者には、パーソンズの A G I L の意義が、厳格で精密な機能（要件）の定式や特定化よりはむしろ、目的論と因果論の連関ないしは媒介にあるように思われる。パーソンズは晩年にいたって、そのシステムと機能の概念をますます生物学モデルへと近づけた。特にそれは、「生きているシステム (living systems)」という概念の導入に顕著に表れている。彼は、当初からシステム概念に目的論的な性質を付与していたが、晩年には生物学者エルンスト・マイアから「テレオノミー (teleonomy)」[Mayr 1988]という概念を借用する。パーソンズはそれを行為の環境として位置づけられるべき有機体システムの特性として考える (cf. [Parsons 1978: 68-69])。

こうした生物学的なシステムイメージは、他の様々な学問領域に関連づけられることで一般化されていく。小室は、機能（要件）を、システムの「目標」ないしは「欲求」として特徴づけ、サイバネティクス的な制御の論理に結びつけた。しかし、彼はパーソンズの A G I L をもっぱら一元的な制御関数として考えることで、パーソンズ独自のサイバネティクスの応用を看過することになった。パーソンズの構想したシステム間関係は、物質的・エネルギー的条件づけと情報制御という二重の階層化を含んでいる。ここには、因

果論と目的論を連関させようとする意図がうかがわれる。システム内には、一方では情報処理の過程が存在し、他方では物理的な過程が存在する。それらは相互に連関しあうことでシステムの作動を実現する。システムの物理的な作動は一定の制御値（それが何であれ）によって制限されると同時に、制御値の実現は物理的な過程によって実現する。パーソンズは精密な論理的形式化も測定尺度も用意していないが、彼の A G I L には小室が指摘した一般均衡分析に類似の形式がみとれる。

もちろん、パーソンズ流の「サイバネティクスの目的論」はそれ自身なおも目的論であって、彼は最後までシステム貢献的な機能概念を放棄することはなかった。ただ、パーソンズはそうしたシステム貢献的な作動を制御/条件づけや相互交換などによって複雑化することで、後に述べるような機能要件論の論理的問題を棚上げにし、「先送り」にしたと言うこともできるだろう。パーソンズは、機能分析一般やシステム理論一般の形式を精密化するよりはむしろ、人間行為の分析図式にシステム理論の論理を選択的に適用する道を進んだのである。

2.2 機能要件の論理的問題

森好夫によれば、そもそも機能という概念は「充足」という事態を前提しているのだが、それが「いかにして」為されるかが（パーソンズも含めて）閑却されがちである[森 1972: 216-219]。システムが「組織された複雑性」(cf. [Bertalanffy 1968: 17, 33])として定義されるなら、その複雑性は、小室の言うように「相互連関分析」という形で分析されるべきである。経済学は、そうした分析を形式化してきた。ただ、機能要件分析はすべて相互連関分析であるが、相互連関分析は、必ずしも要件分析ではない[小室 1967: 27]。機能要件は「充足／不充足」という「2 値」で考えられる傾向がある (cf. [熊田 1983: 92])。小室直樹の「制御関数」[小室 1974: 34-35]も吉田民人の「許容範囲域」[吉田 1974: 202f.]も、論理的には「充足」と「不充足」の関係に還元され得る[志田 1982] [熊田 1983: 93]。

少なくとも吉田と小室の議論では、構造－機能主義に対して科学的な可能性が（批判的にではあれ）追求されていたが、次の世代にあたる論者たちは

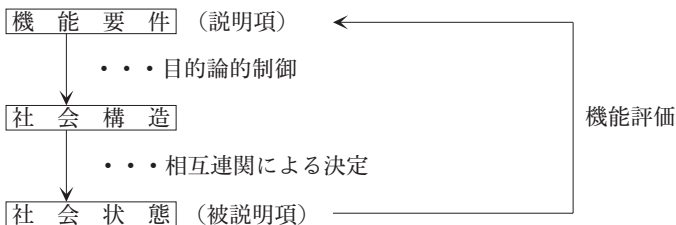
要件分析を放棄するよう動き始める。なかでも、志田基与師と橋爪大三郎らの構造－機能主義批判は、論理的かつ徹底的である。彼らは、小室の流れを汲む人々であって、社会学の理論構成の論議に数理的な方法を導入しようと試みた。彼らの言う構造－機能主義（または社会システム理論）は一種の純粹タイプ（または理想型（Idealtypus））である。その論理的な純粹形態は、「機能要件説」である。彼らの抽出した構造－機能理論の純粹型は「要件論的機能主義」と呼ぶことができるだろう。

志田らによれば、構造－機能主義は、少なくとも様々な仮説を演繹できる真に豊かな理論命題とは言えない。それは、それ固有の主張によって「論理内在的」に限界を持っている。彼らによれば、科学の演繹的な理論は以下の条件を満たすべきである。

- ① 一義性
- ② 一貫性
- ③ 節約（冗長性の排除）

論理的な演繹能力を持つ理論は、一種の説明命題である。それは、説明項と被説明項から成っている。科学理論はこうした説明の（すなわち説明項/被説明項関連の）連鎖を成している。構造－機能主義における説明項と被説明項とは、志田らによって以下のように設定されている（図1参照）。

図1 橋爪・志田・恒松の言う「構造－機能理論」の骨格[橋爪・志田・恒松 1984:8]



こうした図式には、志田らの言う構造－機能的な変動命題にある4つの特徴が表れている。すなわち、(1)社会構造が社会状態を決定する；(2)社会変

動とは社会構造の変動である；(3)機能要件は、社会状態を機能評価する；(4)機能要件が社会構造を制御する；以上である〔橋爪・志田・恒松 1984：8〕。

橋爪や志田らによって、「構造－機能主義」は、或る機能要件によって或る社会状態を説明する理論設計の原理として捉えられる。志田らは、説明項としての機能要件が単一でなければならないという結論に達する。それは、ブルバキ流の順序構造の論理からして必然であるとされる。彼らによれば、機能理論は、機能要件を必須の説明概念として含む命題の体系である。機能要件は一種の「評価関数」である。評価関数は、何らかの順序対を伴う。順序という数理的な構造は、(充足／不充足)推移律などの論理的な原理によって無矛盾的に推論されねばならない。志田らは、ケネス・アローの「不可能性定理」を順序論的に表現し、それを機能要件の論理と結びつける。

複数の主体が複数の評価選択肢を考慮する場合、或る規模を越えるところからは、個々の選択順序と全体の選択順序とが一致しなくなる可能性を排除できない。ここでA、B、Cの3者がX、Y、Zの3項目間で優先順位をつける場合を考えてみる。3者が互いに同じ順序対を構成する場合はもちろん問題がない。しかし、以下のような場合は問題が発生する。

A : $X > Y > Z$

B : $Y > Z > X$

C : $Z > X > Y$

或る個人が3つの項目を選好する場合は、線形順序が想定される。すなわち、その個人が優柔不断か混乱している場合、また途中で基準を変えた場合は別として、論理的には、 $X > Y$ かつ $Y > Z$ かつ $X > Z$ という事態になるはずである。しかし、ABCの3者であれば、線形順序は破られる可能性がある。つまり、 $X > Y$ かつ $Y > Z$ でありながら $Z > X$ となる可能性を排除できない。こうした3つの選言の関係は、もちろん矛盾している。ここから、システムの評価関数すなわち機能要件は、複数を想定することができないという結論に達する(1)。

こうした志田らの議論では、パーソンズやマートンに対する詳細な学説分

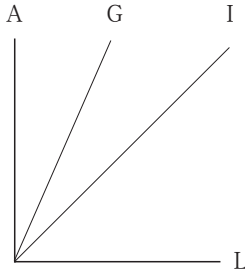
析よりはむしろ、理想型化された（または多少陳腐化された）「構造-機能理論」が扱われるきらいがある。もちろん、それは社会学の「完全理論」[直井 2001]を探究する試みとして有意義であったし、機能主義にはそれ固有の問題があったことも否定しがたい。少なくとも、「2値」による評価関数は、後に見るように評価尺度として問題をはらんでいる。

ただ、パーソンズは志田らが想定したタイプの「機能理論」を構想したのではなさそうである。彼は4つの機能要件を設定している。何らかの単一の（つまり統合された）社会状態は、志田らによれば単一の機能要件でしか説明できない。この見解からすれば、パーソンズの4機能は「冗長」なだけでなく「不可能」である。少なくとも、パーソンズの挙げた4つの機能要件は、システム分化の論理と整合しない[Gould 1976]。AGILは、上位システムに対する下位システムの貢献を指すと同時に、下位システムどうしの相互関係をも示している。こうした二重性は、下位システムどうしの関係をとおして各下位システムの上位貢献が実現されるという構想を示しているように思われる。しかし、AGILの下位にもそれぞれAGILが存在し、そうした下位（の下位）システムどうしが相互交換の専任部門を担当するという発想は、分析図式として過度の複雑性をもたらす[Blain 1970, 1971]。また、一貫した論理による社会分析のモデルとして困難に陥る可能性が出てくる。

ただ、パーソンズは機能要件を互いに無矛盾な順序的關係として構想したのではない。4機能は、当初はバイルズらの小集団実験の知見[Bales 1953][Parsons & Bales 1953]から演繹され、後にはシステムの対環境軸（空間アナロジー）と道具的/達成的軸（時間アナロジー）との「直積」から構成された[Parsons 1959]。こうした当初の素朴なモデル構成は、富永健一によれば「ベクトル」の論理に類似している[富永 1991: 27-28]。ベクトルは合成が可能ながらも、互いに独立した値と方向を持っている（図2参照）。パーソンズの4機能図式（AGIL）は必ずしも仮説演繹的な順序論的説明命題を志したものではない。むしろ、各機能の「不完全な」状態がノーマルなものと思われるような「多変量的」関係を指示しているように思われる。4次元ベクトルは、それぞれ或る一定の値をアприオリに設定できるものではない。その値は、むしろ経験的に「発見」されるべきである。AGI

しそれぞれは、確かに評価的な志向を持っているとはいえ、「関数」や「命題」として展開されてはいなかった。

図2



とはいえ、機能要件という用語に対するパーソンズの言明は、やはり誤解を招く。あたかもシステムがそれらのどれかを「完全に」満たさなければシステムの崩壊を招くかのように受けとめられるからである。パーソンズは、確かにこれらの要件がシステム維持の「必要条件」であるというニュアンスを述べているものの、その正確な「値」を明示していない。

「選言」であれ「ベクトル」であれ、システムの機能が一種の「評価」であることは、パーソンズの生涯をつうじて変わりなかった。行為の実体的な目的論をサイバネティクスによって棚上げにしても、彼のシステム理論の論理は評価的な前提を含んでいる。その代表的な例が「均衡 (equilibrium)」という概念である。彼の均衡概念はかなりの部分「記述的」な水準にとどまっていた、説明的というよりはむしろ「発見的」な概念としての特徴が有力である [Bailey 1984]。しかしそれは、彼のシステム観念が、完全には機械論ではないという事実を示してもいる。

2.3 均衡論の問題

パーソンズのシステム概念の基礎には、一貫して「均衡」という観念が存在していた。しかし、均衡というシステム状態がいかなる特徴を持つのかは一義的に明らかにされることがなかった。彼は、複数の多様なシステム準拠を選択的に組み合わせることによって具体的・経験的な社会現象を観察し、

むしろ「不均衡」（と思われる）状態を分類し記述している（cf. [Parsons 1964], [Parsons & Platt 1973]）。仮に、均衡を単独の機能要件とすれば、志田らの数理的批判に耐えられるのだろうか。

均衡という用語が物理学から来ていることは確かであるが、均衡一般のイメージについてパーソンズはそれほど詳説していない。むしろ、「社会的」な均衡が問題になる。パーソンズは、当初から社会システムの均衡を社会的相互作用の均衡として定義していた。パーソンズは、均衡と統合と秩序をかなりの程度互換的に使っている。

「システムの最も一般的で基本的な特性は、部分ないしは変数どうしの相互依存である。相互依存は、変異可能性のランダムさとは対照的な、部分ないし変数どうしの確定的な諸関係の存在に見られる。換言すれば、相互依存は、システムに参入する構成諸要素間の関係における〈秩序〉である [Parsons & Shils 1951: 107, n.9]。」

また、彼らの言う均衡は「攪乱」からの復帰を含む「自己維持」や「動的均衡」というアイデアを背景にしている。

「こうした秩序は、自己維持の傾向を持っていなければならない。それは、均衡の概念にたいへん一般的な形で表現されている。しかし、それは、静態的な自己維持も安定的な均衡も必要としない。それは、秩序づけられた変動過程であり得る—それは、出発点に関連したランダムな変異可能性よりもむしろ、或る確定的なパタンに従う過程である。これは動的均衡と呼ばれ、その良い例が成長に見られる [Parsons & Shils 1951: 107]。」

ケネス・ベイリーによれば、こうしたパーソンズらによる均衡概念の扱いは、「社会学的にも、システム論的にも」不完全なものである [Bailey 1984: 2]。ベイリーは、物理学的な均衡のアイデアを社会システムの「状態」に適用することに反対する。それは、主体性や主観の意味を重んずるなどという哲学的な理由からではない。むしろ、定量的な尺度への不適合をそこに見出すからである。社会システム分析は、「均衡概念なしに」追求するべきだと彼は述べる。

ベイリーはシステム状態の判断尺度として「連続尺度」がふさわしいという立場をとる。彼は、均衡がシステム全体の状態を指示する尺度としては決

して最適なものではないと言う。均衡は、パーソンズらにとって、多くの場合 2 値的な尺度である。それは、「均衡状態」と「不均衡状態」という 2 つしか値を含まない。しかも、それは本来的に「恣意的」な尺度である。ただ、尺度が恣意的であることは特に問題ではない。たとえば、華氏温度上の零度は、恣意的である。どこを零度にするかは、任意である。しかし、華氏尺度は、連続的で排他的 (unique) である。所与の当該システムにおいては、零度という状態がただ一つしか存在しないのである。

しかし、尺度としての均衡は恣意的なだけでなく「没排他的 (nonunique)」である。あらゆる非ランダム状態が均衡と呼ばれ得る。特に、パーソンズらが言う「動的均衡」ではそうである。ベイリーによれば、動的均衡も、またパーソンズが引用したウォルター・キャノンのホメオスタシスも、均衡という概念のはらむ問題を解決できなかった。それは、ベイリー自身が均衡の本来的な意味を熱力学に求めたことによっている。

「均衡は、要するに、特殊な諸条件下での規則性という概念にすぎない・・・またもちろん、その維持は決して不可避のものではなく、それが依存する諸条件が一定の限界を越えて変動した場合に消滅し、まったくのランダムさよりはむしろ別の規則性へと再び進む可能性が最も高い[Parsons 1961 : 338]。」

ベイリーは、上記の文言を引用しつつ、そうした均衡概念 (非ランダム性) がシステムという存在にとって必須であることを認めながら、それが絶望的なくらい恣意的で無限数の場合が想定されることを指摘する。少なくとも統計的な基準を見出そうとすれば、そうならざるを得ない。彼は単純な例を挙げる。

それは、2 つの順序変数 (X, Y) それぞれに「高い」範疇と「低い」範疇があり、4 元的な交差表を構成するというモデルである (表 1 参照)。各セルから期待値を χ (カイ) 二乗によって計算する。それは、2 変数がランダムに散布されたとしたら各区画に現れるだろう値である。両変数が完全に無関係なら (つまりランダムなら) χ 二乗はゼロになる。パーソンズとシルズの「ランダムさ」を仮に統計的に命名したらそうなるだろう。「ランダムさ」は、彼らが「確定的な諸関係の存在」の相互依存と対照させたものである (表 1 参照) [Bailey 1984 : 4-5]。

表 1 仮説的な 4 元表における期待値

Y	X		合計
	高	低	
高	24	16	40
低	36	24	60
合計	60	40	100

とすれば、パーソンズらの言う均衡とは、(a)ゼロではない（非ランダムな）関係がシステムにおける変数間に存在し、(b)この関係が時間をつうじて一貫している：そうした事態を表していることになりはしないか[Baily 1984 : 5]。したがって、「動的均衡」というアイデアをベイリーは2つの点から疑問視する。一つは「どのくらいの時間継続する均衡か」という点と、もうひとつは「どの程度の均衡か」という点である。この二つの“How”は、パーソンズは明確に述べなかった点である。たとえば、「ユールのQ」が1.0のまま100年継続するとか・・・。「誇張して言えば、長期にわたって自己維持し安定している弱い関係か、それとも短期でしか安定しない強い関係か、これらのどちらが最も密接に均衡の条件を満足するのか？[Baily 1984 : 5]」

ベイリーの統計数理的な批判はさらに続く。「システム諸関係ないしは諸変数が時間をつうじて一貫している場合は常に、均衡が存在すると言えるのだが」、[それにもかかわらず、物理学によれば、極大エントロピーに結びついた或る究極的ないしは真の均衡が存在する]。ベイリーは、こうしたことが「極大のシステム統合ではなく、むしろ皮肉なことに、その対極ないしは極大の無秩序（ランダムさ）である」と述べる[Baily 1984 : 12]。物理学の第二法則（エントロピー増大）によれば、「究極的な均衡は、全体社会の進化という最高次の状態ではなく、実際はむしろ、システムの死である」[Baily 1984 : 11]。

たとえば、階層ごとの資産の完全平等は統計的には完全にランダムな事態である。これは、均衡ではあるが、無秩序である。ある単独の階層に資産が偏っている場合、完全不平等であるがランダムではない。これは一種の秩序である。統計的な秩序観念と社会的な秩序観念を混同することは、社会学と

して不適切である[Baily 1984: 14-15]。結局、ベイリーは、社会学的な分析において、均衡の概念は不必要であり不適切であることを結論づける。

しかし、パーソンズは統計的秩序と社会秩序とを本来区別していた。合理的な利害追求による事実的な競争決着（弱肉強食）や「利害の偶然の一致」は一種の「事実的秩序」または統計的秩序である。しかし、パーソンズが社会学に求めたのは、「規範的秩序」すなわち人間社会の「有意味な秩序」の解明だった[Parsons 1937/1968: 91-92][大黒 1999: 54]。ただ、均衡という概念を多用するなかで、こうした点が次第に曖昧になっていったように思われる。ベイリーは、パーソンズらが言う「2人以上の個人行為者による相補的な相互作用」が社会システムの安定にとって有効である（cf. [Parsons 1951: 205]）ことは認めるものの、それが「均衡」と呼ばれる必要はないと述べる[Baily 1984: 7-8]。

晩年にいたって、パーソンズははっきりと初期・中期の「物理学的」な連立方程式モデル（パーソンズは「ニュートン・モデル」と呼んだ）を放棄して、「メンデル・モデル」と自ら呼んだ「生物学的」で情報制御的な強調を含むモデルへと志向していった[Parsons 1977: 133-134]。したがって、パーソンズはそもそも定量的・連続的な「尺度」を求めてシステム理論を展開したのではない。彼にとって、相互作用の「均衡」は、なんらかの具体的な経験からの一般化ではない[Parsons 1951: 481]。それは、いわば一種の「アナロジー」であり、定量的尺度よりはむしろ「発見的」な用具としてより良く用いることができる。ただ、たとえそれが「記述的」「発見的」な用途を想定してしようとも、少なくとも「典型的な」システム状態を確定することは社会の科学的分析にとって必須であるように思われる。パーソンズは、そうしたシステム状態を確定的に述べていない。生物学からホメオスタシスの観念を借りてきたのも、そうしたシステム状態のアナロジーを一つ追加したにすぎない。ベイリーによれば、そもそも、均衡とホメオスタシスとが混同されることをキャンオン自身は忌避していた[Baily 1984: 9]。

パーソンズのシステム理論から均衡という概念を排除することは不可能ではない。少なくとも、力学や機械論のアナロジーは不必要である。そして、システムの単独の機能要件として均衡を想定することもまた、以上の論旨か

らすれば適切とは言えない。開放システムとしての社会システムの「秩序」を論じるには、パーソンズの理論図式を、また機能主義の議論を機械論からも生物アナロジーからも解放する必要があるだろう。

3. 機械論を超えて

3.1 機能概念の相対化

新明正道によれば、社会学における機能概念は、そもそも2つの要素をはらんでいる。ひとつは、“function”の語が数学的な「関数」という含意を持つことに見られるように、一種の「対応的」な側面を持ちやすいということである[新明1967:291-292]。もうひとつは、少なくとも構造や構成といった概念よりは機能の概念の方が「時間的」な含意を多く持っていることである。機能は、比較的可変的で過程的な事態を指示しやすいのである[新明1967:288-290]。新明は、前者（対応含意）よりも後者（過程含意）を重視する。彼はパーソンズらの構造-機能主義が、實際上、構造を論理的な優先事項としていることを指摘し、時間的・過程的な含意を大きく犠牲にしていることを問題視する。新明は、機能概念の時間的・過程的な含意を強調する立場を「本源的機能主義」と呼ぶが、彼の問題関心は、機能概念の論理的ないし形式的な側面よりむしろ実体的で内容的な側面にあった[新明 1967:16-19, 117-119]。

新明の主張とは異なって、多くの機能主義に対する議論は依然として「対応的」側面に多く関わっている。志田らのパースペクティブを相対化するには、少なくとも因果論的な機能論議からも「貢献的対応」含意からも抜け出す必要がある。ニクラス・ルーマンは、独特のシステム理論の構想によって早くからパーソンズの理論を批判的に摂取し、新たな理論構想へと活用してきた。その最も早い例が、彼の言う「機能-構造主義」である。ルーマンは、マートンの機能的代替性に注目し、当初にパーソンズが論じた構造に対する機能の貢献的対応に対照させる。機能は構造に先立つというのが、ルーマンの発想である[Luhmann 1970:113-114]。また、ルーマンは機能関係が因果関係よりも広範な射程を持つことを指摘する。旧来の因果論的な機能分析

批判が機能関係を因果関係の特殊ケースと見ていたのとは対照的に、彼は因果関係を機能関係の特殊ケースと見る[Luhmann 1970 : 16f.]。

こうしたルーマンの方法論的な見解は、システムの概念化ないしはシステム理論と接合することで彼独自の社会理論へと結実した。ルーマンは機械的な因果論からシステム動態の比較論へと社会学理論の焦点を移動させようとしているかに見える。ルーマンはその後、自己準拠（自己言及）の論理を展開することになるが[Luhmann 1984]、ここでは触れる余裕がない。ただ、彼が機能関係を因果関係に還元せず、社会学における独特の方法として「機能的方法」を位置づけたことには注目すべきである。ルーマンは、機能を特権的な説明概念として使用する道を選ばなかった。機能それ自体ではシステムの網羅的な説明をも、また記述をも完成させることができない。

マートンは、少なくとも全体社会に対する一般理論の早急な定式化を禁欲するよう主張し、中範囲の理論を標榜した。マートンにとって、機能は経験的に発見されるものである。彼は、特定の社会-文化的な項目と特定の機能とを厳格に対応させることを回避した[Merton 1968 : 39-72, 73-138]。パーソンズは、少なくとも晩年の段階では、こうしたマートンの方向を評価して自らの理論的な志向との収斂を図った。彼は「機能主義」よりは「機能分析」という限定的な射程を表す名称を選ぶべきだと言いは始める。そして結局、パーソンズは、「構造-機能的 (structural-functional)」という名称すら放棄することを決定した[Parsons 1977 : 100-101]。

ただ、こうした名称の変更よりも重要なのは、パーソンズの理論展開において機能概念の限定化の動きがあったことである。1966年に出されたチャールズ・アッカーマンとの共著論考「理論的<用具>としての社会システム概念」において、パーソンズは機能をシステム/環境関係におけるエネルギーインプットとして特徴づけている。これに対して、一般的なシステム間関係は相互浸透と呼ばれる[Parsons & Ackerman 1966 : 31-32]。この論考では、機能をシステムからシステムへと存続と活動のための必須条件を供給する働きとして定義している。少なくとも、機能は具体的なシステム状態の特権的な説明概念ではない。その後、パーソンズは「生きているシステム (living systems)」に射程を絞り (cf. [Parsons 1977 : Ch.4, Ch.10]), 機能をもつ

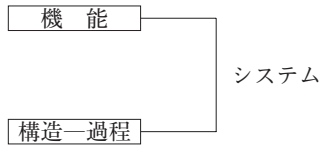
ばら生物学的なモデルへと結びつける。パーソンズにとって機能とは「システムの機能」であり、システムという上位概念がなければ意味をなさない。ただ、それは連続的・定量的指標や尺度ではなく、システムと環境との関係を、また分化したシステム間の関係を発見するための分析的道具である [Parsons 1977: 103-104, 230]。

パーソンズは、晩年にいたるまで実体的な分類図式という性質を残留させたと考えられる。パーソンズは「機能分析」という表題の下で、機能要件の精密な操作化を棚上げにして、実質的にはA G I Lを実体的なモデルとしてその一部を「選択的に」使用するという方法を採用している。パーソンズは、機能分析とシステム理論を保持しつつも、経験的な社会調査にA G I Lを積極的に応用しようとした。『アメリカの大学』 [Parsons & Platt 1973] は、そうした作業の一環である。そこにおいて使用された分析的な概念用具は、象徴メディアと相互交換だった [大黒 2003]。パーソンズ自身は、これを「機能分析」の中核要素とみなしたが [Parsons 1977: 114-115]、厳密な要件分析の論理とは別に、これらの実体的なモデルとしての有効性を判断することは可能であろう。筆者は、機能の概念を発見的指標として、さらには定量的ないしは統計的な指標として考案する方向も排除すべきでないと思う。富永の言う「ベクトル」である。パーソンズはそうした道をあえて採らなかったが、筆者は構造と機能との関係を変更することで、機械論と生物アナロジーを相対化することができると思う。

3.2 構造と行為をめぐる問題

機械論的な分析からパーソンズの「システム」を救済するには、もうひとつ課題がある。それは、「構造」という概念の位置づけにかかわる。これまでの構造—機能主義をめぐる議論の多くは主に「機能」に焦点があって、「構造」についての議論は意外にも少ない。パーソンズ自身は、構造と過程とをその相対的な可変性によって区別していた。構造は一種の「定数」なのである [Parsons 1945/1954: 217]。構造と機能とは抽象の水準が異なり、構造と過程とが同列の水準に置かれるべきであるという考えにパーソンズは至る (図3参照) [Parsons 1977: 100-101]。

図 3



しかし、社会の構造は経験的な概念化にゆだねられてしまい、概念論としては詳細に議論されていない。富永は社会変動を構造変動として定義し（構造—機能—変動理論）[富永 1986: 184f.]、彼を批判している志田たちも社会状態を社会構造が決定するという説明方式を構造—機能主義の特徴としている。ただ、こうした社会構造に対する言及も、機能または機能要件ほどには構造を詳説していない。

機能主義では説明的な役割を負っているのは明らかに機能の方であって構造ではない。アンソニー・ギデنزは、システムと構造とが誤って同一視されていると言う[Giddens 1977: 112]。ギデنزは構造主義 (structuralism) の発想を参照しつつ、むしろ構造概念の説明力を強調する。機能は行為者の意図に還元できないシステムの特徴だった。しかし、構造もまた、古くからそうした全体の特性として概念化されてきた[Giddens 1977: 113]。そのみならず、近年は集会的な因果性を表す言葉として使われてきた[Bottomore & Nisbet 1978: 593-594]。エミール・デュルケムからクロード・レヴィ＝ストロースに至る「行為者が無自覚な深層の集会的規則」の発見は、自然法則とは異なる独特の性質を人間の社会と文化に付与してきた。いわば、社会・文化の「構文論」である。

パーソンズによればレヴィ＝ストロースの構造主義的方法は、複雑な近代社会を対象とする理論として洗練が不充分とのことだが[Parsons 1982: 61]、社会—文化的対象を独自存在 (sui generis) として扱うというデュルケム以来の社会学の伝統をそれが強化した貢献は大きいと言わねばならない。構造主義はレヴィ＝ストロースの「構造人類学」を越えて、社会—文化的諸研究の認識論的な「突破」を導いたとすら言えるだろう。

かつて日本の構造—機能主義を担っていた吉田民人は、独自の社会情報学

的な観点から旧来の人文科学的理論／自然科学的理論という区分について新たな視点を提供した。吉田は、分子生物学の発達を契機として、あらゆる科学はその目標によって法則学とプログラム学とに分類できるとする。吉田の言う「プログラム」とは、「自然の生物層と人間層に内在する何らかの進化段階の「記号」によって構成される秩序原理」であり、「自然内在的な記号によって構成され、その結果特殊性と可変性を特色とする秩序原理として、自然内在的な記号と関わりのない（物質層には記号が存在しない）普遍・不変の「法則」（物理科学法則、物理学法則と化学法則）とはまったくタイプを異にする秩序原理である」[吉田 2006: 19-20]。

吉田は、古典物理学以来の自然科学の主流を法則発見的学科と呼ぶ一方で、人ゲノム計画に代表される分子生物学の最近の展開と言語学および人類学における構造主義の流れをプログラム発見的学科と名づけている（cf. [吉田 1995]）。尤も、これは経験的・具体的な内容を捨象した形式的な定式化を目指す限りでの分類であり、両科学は抽象的形式理論を定立することでは共通である。吉田の言うプログラム科学は、こうした社会－文化科学の構造主義的な展開を、自然科学における理論的プロジェクトの発展に依拠してフォーマルな面から翻訳しようとしたものと言える。

シュテファン・イエゼンは、人間行為が「行動」から区別されるのは、象徴的な意味が一種の「プログラム」を構成しているからであると述べる。人間は、抽象的には多くの「行動」から成るシステムである。プログラムは、「前以て」「具体的な個人（個体）とは別に」存在する。言語や技術や文化的象徴といったものが、行為のプログラムを構成している[Jensen 1983: 83-84]。パーソンズもまた、行為とは「象徴的に志向づけられる限りでの人間行動」であるとした[Parsons & Platt 1973: 8-9]。行為システムの「プログラム」作用は、その象徴的な特性に含意されている（2）。

筆者は構造主義で言われる「構造」と吉田が言う「プログラム」が社会システムに対してかなり似た関係を持っているように思われる。ギデنزは、機能主義における構造を「行為の安定したパタン」であるとする一方、自らの「構造化理論」における構造には「生成規則と資源」という二重の性質を付与する[Giddens 1977: 117-118]。それは、プログラムが物的パタン上に

顕現する複合的な記号規則であることと類似している。

パーソンズは構造が機能よりも一段低い抽象水準にあるものとして概念化した。筆者は、構造の説明的な地位と抽象水準とを格上げすべきだと思う。小室や志田らが想定した「要件論的機能主義」タイプのように機能によって構造が制御されるのではなく、構造によって機能が制御されるという布置に転換すべきである。ただ、機能はそれ独自の運動が可能である。仮に言語学のアナロジーを用いるなら、構造またはプログラムは「構文論的」規則であり、機能またはシステムの現実動態は「語用論的」過程である。社会システムの理論と分析はそうした「構文論的規則」という深層を発見することが使命のひとつとなる。

4. むすび—「構造—機能」理論の新たな意味

富永健一は、パーソンズが「構造-機能的」という名称を放棄した後もあえてこの名称を使用することを選んだ。パーソンズは構造と機能が別の水準に位置する概念だということをもって両者を切り離す理由にしている。富永は、逆に、別の水準にあるからこそ連結すべきだと述べている[富永 1986 : 206]。筆者は、富永とは多少違った理由から、「構造—機能」理論という名称を使う意味を考えてみた。それは、プログラムとしての構造と関係発見指標としての機能という組み合わせである。

パーソンズの「機能主義」は志田らの言う「要件論的機能主義」像とは異なる説明方針を目指していた。しかし、機能に評価的な側面を残す限り、志田らの批判から逃れることはできない。一方、閉鎖システムではない社会システムは均衡という単独の機能要件を活用できない。パーソンズ自身、機械論的なシステム理論を目標にしていたとは思えない。晩年はますます生物的なシステムモデルに近づいた。しかし、我々は有意義な行為の把握と集合的なシステム動態の分析とを連携させるためには、生物アナロジーとは別の道を進むべきである。

筆者は、「構造」の意味の変更を提案した。構造は機能の下位に位置づけられるべきではない。それらは、システムの「二重の」方法原理として位置

つけられるべきである。「構造－機能的 (structural-functional)」という名称は、それ自体一種の収斂を表現している。それは、あえて言語学のアナロジーを用いるなら、構文論と語用論の連携と表現できるかもしれない(図4参照)。

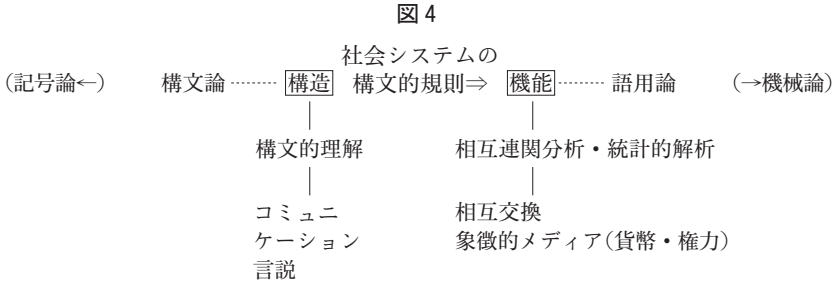


図4の右半分ではパーソンズの理論資源を活用している。左半分が新たに接続された部分である。社会システムの要素(行為であれコミュニケーションであれ)を産出する文化的「遺伝情報」がそこに蓄積されている。これは、いわば折衷的な図式化ではあるが、〈社会システムの客観的動態を分析する〉という課題と〈その社会システムが有意味な行為から構成されている〉という想定とを関連づけるためにひとつの方向性を示したつもりではある。

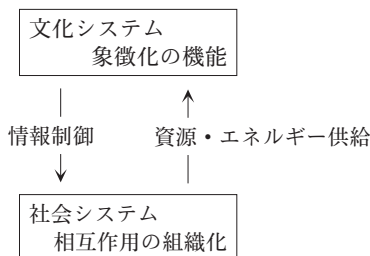
とはいえ、本稿で示したような「構造－機能」理論は、直井や志田らの目指した「完全理論」などとはとうてい言えない。それは、「モデルの折衷」の勧めにすぎないとも言える。それどころか、社会変動のイメージが見当たらないがゆえに、これでは後退ではないかという見方もできるだろう。志田らの「要件論的機能主義」像では、機能による構造の制御という機制があった。本稿で格上げされた「構造」は、機能から何を受け取るのかここからは判然としない。機能は構造を発見するためのデータ資料を提供するくらいしかない。

ただ、社会変動はやはり複雑な事態である。パーソンズ自身は、象徴的メディアの動態によって比較的短期の変動を、社会進化図式によって長期の変動を分析しようとした(cf. [Parsons 1969][Parsons & Platt 1973][Parsons 1971])。社会進化の基礎には「一般適応能力の増大」という社会システムに

対する評価的な概念が存在していた[Parsons 1966][Parsons 1971]。しかし、個々の歴史的な変動を分析するにはさらに複合的な理論装置を必要とするだろう。仮説演繹的な完全理論を目指すことはひとまず棚上げにしても、モデルの折衷から始める方が、経験科学としては実り豊かであろうと筆者には思われる。

パーソンズはシステム理論の代表者と目されてからも、一貫して「行為」という語は捨てなかった。いやむしろ、彼は人間行為を一貫してシステムとして分析し概念化しようと努めた。パーソンズの社会理論は、実質的には「行為システム」の理論だと言っても過言ではない(3)。この行為システムは、いわば集合的なプログラムを持っている。それは、文化システムと社会システムの分化に表現されている(cf. [Parsons 1961]([図5](#)を参照)(4)。

図5 (一般) 行為システムの有意味な下位システム



パーソンズのAGILの意義は、厳格で精密な機能(要件)の定式や特定化よりはむしろ、目的論と因果論の連関ないしは媒介にあるように思われる。パーソンズは、行為システムの次元でも象徴的メディアの「相互交換」を想定している。

本稿で提案した意味での「構造-機能」理論の適用射程は、システム理論の適用射程をどう考えるかによって違って来るだろう。パーソンズは社会システムの「上位」に行為システムを想定した。彼はさらに、人間の条件(the human condition)という上位システムを考案した。しかし、ルーマンはそうではなかった。彼は上位/下位という包摂よりも機能分化の多様性を重視した。それは、分化した各システム固有の「コード」に注目するという方向へと向かった[Luhmann 1984]。

筆者としてはルーマンの戦略の方に魅力を感じるが、それはパーソンズとルーマンの「収斂」というかなり困難な道を予感させる。本稿で論じた方向性が「思いつき」で終わるのか、それとも多少は実りある理論的方向性をもたらすのかは、ルーマンを含む近年のシステム理論を検討するなかで明らかになるだろう。時代遅れの覚書は、次の作業のためにここでいったん閉じようと思う。

〈注〉

- (1) 直井優は、こうした個人選好による社会的厚生関数の合成とは異なる見解をアマルティア・センの議論に見出している[直井 2001:195]。
- (2) パーソンズは晩年、「メタ構造 (meta-structure)」という深層規則を指示する概念を考案した[Parsons 1978]。しかし、それはイマヌエル・カントの超越論的哲学からの類推である。分子生物学の遺伝情報論とカント哲学との収斂すら論じられている (cf. [Parsons 1978] [Parsons 1982])。
- (3) ルーマンはこうしたパーソンズの試みに一定の評価を与えていた。ただ、ルーマンは行為システムという概念を放棄し、コミュニケーションを社会システムの最小要素とした。
- (4) リヒャルト・ミュンヒは、パーソンズの行為分析の図式を改訂した。彼は、人間行為の知的分析の手続きを、因果から「接続」へと一般化することでパーソンズのAGILを改訂する。行為のシステムは、行為の複雑性（前件）と偶発性（後件）とを「二重に縮減する」分析的な概念装置である。行為は接続の「前件」として象徴的な複雑性が問題になり、接続過程の帰結（後件）として偶発性が問題になる。ミュンヒは、行為の分析について、4つの方法論的な手続を区別している。理想型、法則論的仮定、個性記述、構成主義的モデル、以上である [Munch 1988:118-121]。

〈参考文献〉

タルコット・パーソンズの単共著

- [Parsons 1937/1968] Talcott Parsons, *The Structure of Social Action: A Study in Social Theory with Special Reference to a Group of Recent European Writers*, the Free Press, Paperback edition, 1968[1st edition, 1937, 2nd edition, 1949].
- [Parsons 1945/1954] “The Present Position and Prospect of Systematic Theory in Sociology,” Georges Gurwitsch (ed.), *Sociology in the Twentieth Century*, 1945 (Talcott Parsons, *Essays in Sociological Theory*, revised edition, the Free Press, 1954, Chp. XI, pp. 212-237.)
- [Parsons 1951] Talcott Parsons, *The Social System*, The Free Press, 1951.
- [Parsons 1959] Talcott Parsons, “General Theory in Sociology,” Robert K. Merton (ed.), *Sociology Today volume I: Problems and Prospects*, Ch.1[pp. 3-38].
- [Parsons 1961] Talcott Parsons, “Introduction to Part Four-Culture and the Social

- System,” [Talcott Parsons, Edward Shils, Kaspar D. Neagele and Jesse R. Pitts (eds.), *Theories of Society: Foundations of Modern Sociological Theory*, The Free Press, 1961.]
- [Parsons 1964] Talcott Parsons, *Social Structure and Personality*, New York, the Free Press, 1964.
- [Parsons 1966] Talcott Parsons, *Societies: Evolutionary and Comparative Perspective*, Prentice Hall, 1966[矢沢修次郎[訳]『社会類型—進化と比較』, 1971年, 至誠堂]
- [Parsons 1969] Talcott Parsons, *Politics and Social Structure*, Routledge & Kegan Paul Ltd., 1969.
- [Parsons 1971] Talcott Parsons, *The System of Modern Societies*, Prentice-Hall, 1971/井門富士夫[訳]『近代社会の体系』, 至誠堂, 1977年]
- [Parsons 1977] Talcott Parsons, *Social Systems and the Evolution of Action Theory*, New York, the Free Press, 1977.
- [Parsons 1978] Talcott Parsons, *Action Theory and the Human Condition*, The Free Press, 1978. [[訳1]: 徳安彰・挟本佳代・油井清光・佐藤成基訳『宗教の社会学—行為理論と人間の条件 第三部』, 勁草書房, 2002年。[訳2]: 徳安彰・挟本佳代・油井清光・佐藤成基訳『人間の条件パラダイム—行為理論と人間の条件 第四部』, 勁草書房, 2002年。]
- [Parsons 1982] Talcott Parsons, “Action, Symbols, and Cybernetic Control,” (Ino Rossi (ed.), *Structural Sociology*, Columbia University Press, 1982, Ch. 3, pp. 49-65.)
- [Parsons & Shils 1951] Talcott Parsons & Edward A. Shils (eds.), *Toward a General Theory of Action*, 1951.
- [Parsons, Bales & Shils 1953] Talcott Parsons, Robert F. Bales and Edward A. Shils, *Working Papers in Action Theory*, the Free Press, 1953.
- [Parsons, Bales & Shils 1955] Talcott Parsons, Robert Bales & Edward Shils, *Family, Socialization, and Interaction Process*, the Free Press, 1961.
- [Parsons & Smelser 1956] Talcott Parsons and Neil J. Smelser, *Economy and Society: A Study in the Integration of Economic and Social Theory*, Routledge and Kegan Paul, London, 1956.
- [Parsons & Ackerman 1966] Talcott Parsons, & Charles Ackerman, “The Concept of ‘Social System’ as a Theoretical Device,” DiRenzo G.J. (ed.), *Concept, Theory, and Explanation in the Behavioral Sciences*, pp. 24-40.<独訳 [Jensen 1976: S. 69-74]>
- [Parsons & Platt 1973] Talcott Parsons and Gerald Platt (eds.) (with Neil J. Smelser), *The American University*, Harvard University Press, 1973.

タルコット・パーソンズ以外の文献

< 欧文 >

- [Alexander 1983] Jeffrey C. Alexander, *Theoretical Logic in Sociology, vol. 4, The Modern Reconstruction of Classical Thought: Talcott Parsons*, Berkley, CA, University of California Press, 1983.
- [Bailey 1984] Kenneth Bailey, "Beyond functionalism: towards a nonequilibrium analysis of complex social systems," *The British Journal of Sociology*, vol. 35, No. 1, pp. 1-18.
- [Bales 1953] Robert F. Bales, "The Equilibrium Problem in Small Groups," Talcott Parsons, Robert F. Bales and Edward S. Shils, *Working Papers in the Theory of Action*, 1953, the Free Press, Chapter IV, pp. 111-161.
- [Bertalanffy 1968] Ludwig von Bertalanffy, *General System Theory: Foundations, Development, Applications*, George Braziller, 1968. (フォン・ベルタランフィ／長野敬・太田邦昌 (訳), 『一般システム理論』, みすず書房, 1982年)
- [Blain 1970] Robert Blain, "A Critique of Parsons' Four Function Paradigm," *The Sociological Quarterly*, 1970, pp. 157-168.
- [Blain 1971] Robert R. Blain, "An Alternative to Parsons' Four-function Paradigm as a Basis for Developing General Sociological Theory," *American Sociological Review*, 1971, Vol.36, August, pp. 678-692.
- [Bottomore & Nisbet 1978] Tom Bottomore and Robert Nisbet, "Structuralism," Tom Bottomore and Robert Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books, 1978, Ch. 14.
- [Buckley 1967] Walter Buckley, *Sociology and Modern Systems Theory*, 1967, Prentice-Hall.
- [Buxton 1985] William Buxton, *Talcott Parsons and the Capitalist Nation-State: Political Sociology as a Strategic Vocation*, 1985.
- [Cannon 1932] Walter B. Cannon, *The Wisdom of the Body*, New York, Norton, 1932.
- [Giddens 1977] Anthony Giddens, *Studies in Social and Political Theory*, 1980 (1977).
- [Gould 1976] Mark Gould, "Systems Analysis, Macrosociology, and the Generalized Media of Social Action," (Loubser, J. J. et. al. (eds.), *Explorations in General Theory in Social Sciences*, 1976, Ch. 20, pp. 470-506.)
- [Hempel 1959] Carl G. Hempel, "The Logic of Functional Analysis," Gross, E., (ed.), *Symposium on Sociological Theory*, Harper & Row, 1959.
- [Holton & Turner 1986] Robert J. Holton & Bryan S. Turner, "Against nostalgia: Talcott Parsons and a sociology for the modern world," Robert J. Holton & Bryan S. Turner (eds.) *Talcott Parsons on Economy and Society*, 1986/1988, Chapter 5, pp. 207-234.
- [Jensen 1976] Jensen, S. [Ed., Hrg.], *Talcott Parsons—Zur Theorie sozialer Systeme*.
- [Jensen 1983] Stefan Jensen, *Sytemtheorie*, W. Kohlhammer Verlagm 1983.

- [Lidz & Bershadly 2000] Victor M. Lidz / Harold J. Bershadly, "Convergence as Method in Theory Construction," *Österreichische Zeitschrift für Soziologie*, Sonderband 6, 2000, S.45-106.
- [Luhmann 1970] Niklas Luhmann, *Soziologische Aufklärung*, 1 (1970),4 Afl. (1974).
- [Luhmann 1984] Niklas Luhmann, *Soziale Systeme: Grundriss einer Allgemeinen Theorie der Gesellschaft*, Suhrkamp, 1984.
- [Mayr 1988] Ernst Mayr, *Toward a New Philosophy of Biology: Observations of an Evolutionist*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1988. (八杉貞雄・新妻昭夫(訳), 『進化論と生物哲学—進化学者の思索—』, 東京化学同人, 1994年。
- [Merton 1968] Robert K. Merton, *Social Theory and Social Structure: Toward a Codification of Theory and Research*, Free Press, Collier Macmillan, 1968.
- [Moore 1978] Wilbert E. Moore, "Functionalism," Tom Bottomore and Robert Nisbet (eds.), *A History of Sociological Analysis*, Basic Books, 1978, Ch.9.
- [Munch 1988] Richard Münch, "Parsonian Theory Today: In Search of a New Synthesis," Anthony Giddens & Jonathan H. Turner (eds.), *Social Theory Today*, Cambridge, 1988, pp. 116-155.)
- [Robertson & Turner 1991] Roland Robertson & Bryan S. Turner (eds.), *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, SAGE Publications, 1991.
- [Robertson 1991] Roland Robertson, "The Central Significance of 'Religion' in Social Theory: Parsons as an Epical Theorist," Roland Robertson & Bryan S. Turner (eds.), *Talcott Parsons: Theorist of Modernity*, SAGE Publications, 1991. Ch.7.
- <邦文>
- [大黒 1999] 大黒正伸「パーソンズによる秩序問題の射程—初期パーソンズの功利主義批判を中心に—」, 『ソシオロジカ』, 第24巻第1号, 1999年12月, 43-67頁。
- [大黒 2003] 大黒正伸「パーソンズ理論における貨幣と言語—シンボリック・メディア理論の再検討—」, 松本和良・江川直子・大黒正伸[編著]『システムとメディアの社会学』, 恒星社厚生閣, 2003年, 第二章。
- [大黒 2009] 大黒正伸『パーソンズ社会理論の方法的構想力—一般理論から「媒介」の理論へ』(学位請求論文, 博士(社会学), 2009年創価大学)
- [熊田 1983] 熊田俊郎「関係概念としての「機能」—機能主義理論再構成のために—」『社会学研究科紀要』, 第23号, 1983年, 87-95頁。
- [小室 1966] 小室直樹「構造機能分析と均衡分析—パーソンズ枠組の発展的再構成へむかって—」, 『社会学評論』第16巻第4号, 1966年(通号64), 77-103頁。
- [小室 1967] 小室直樹「構造機能分析の原理—社会学における一般分析理論構築の準備—」, 『社会学評論』第18巻第3号, 1967年(通号71), 22-38頁。
- [小室 1969] 小室直樹「機能分析の理論と方法」, 『社会学評論』第20巻第1号, 1969年(通号77), 6-22頁。

- [小室 1974] 小室直樹「構造－機能分析の論理と方法」, 青井和夫(編)『社会学講座 第1巻－理論社会学－』, 東京大学出版会, 1974年, 第2章, 15-80頁。
- [厚東 1980] 厚東洋輔「主意主義的の行為理論」, 安田・富永・塩原・吉田[編]『基礎社会学 第I巻－社会的行為－』, 東洋経済新報社, 1980年, 70-91頁。
- [志田 1982] 志田基与志「機能要件と許容域－2分法的評価の限界－」『ソシオロギス』, 第6号, 16-28. 1982
- [志田 1997] 志田基与志「社会学におけるシステム理論のジレンマ－日本における構造－機能分析の発展と没落」『現代社会学－現代社会学の理論と方法(別巻)』, 岩波書店, 1997年, 21-38頁。
- [新明 1967] 新明正道『社会学的機能主義』, 誠信書房, 1967年。
- [富永 1965] 富永健一『社会学原理』岩波書店, 1986年。
- [富永 1991] 富永健一「日本の近代化と欧米の社会学思想－日本の精神的近代化の一側面」『思想』10月号(808号), 4-38頁。
- [中野1999] 中野一郎『タルコット・パーソンズ－最後の近代主義者－』, 東信堂, 1999年。
- [直井 1984] 直井優「構造－機能主義による説明とテスト可能性」, 『社会学評論』137巻(特集・パーソンズ以後), 1984年(35-1), 19-28頁。
- [直井 2001] 直井優「構造－機能理論の危機そして没落からの克服」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第27巻, 2001年, 191-203頁。
- [橋爪・志田・植松 1984] 橋爪大三郎, 志田基与師「危機に立つ構造－機能主義－わが国における展開とその問題点－」, 『社会学評論』137巻(特集・パーソンズ以後), 1984年(35-1), 2-18頁。
- [森 1972] 森好夫『文化と社会的役割』, 恒星社厚生閣, 1972年。
- [油井 2002] 油井清光『パーソンズと社会学理論の現在－T・Pと呼ばれた知の領域について』, 世界思想社, 2002年。
- [吉田 1962] 吉田民人「A・G・I・L修正理論－パーソンズ教授への提言－(その1)」, 関西大学文学論集, 1962年, vol.11-No.6。
- [吉田 1974] 吉田民人「社会体系の一般変動理論」青井和夫(編)『社会学講座 第1巻－理論社会学－』, 東京大学出版会, 1974年, 第5章, 189-238頁。
- [吉田 1995] 吉田民人「ポスト分子生物学の社会科学－法則定立科学からプログラム解明科学へ－」, 『社会学評論』通号183, 1995年, 第46巻3号, 274-294頁。
- [吉田 2006] 吉田民人「大文字の第二次科学革命」『情報社会学会誌』, Vol.1, No.1, 2006年, pp.15-32。